

中越地震被災コミュニティが抱く復興への認識 —新潟県小千谷市東山地区9集落の復興曲線から—

Community Recognition of Revitalization from Mid Niigata Prefecture Earthquake
- A case study of villages in Higashiyama Area, Ojiya City, Niigata Prefecture, using Revitalization Curves -

公共システムプログラム
12M43144 五味 希 指導教員 土肥真人
Public Policy Design Program
Nozomi Gomi, Adviser Masato Dohi

ABSTRACT

This study focuses on villages in Higashiyama Area, Ojiya city, Niigata Prefecture which suffers from severe depopulation and population aging caused by Mid Niigata Prefecture Earthquake which occurred on October 23, 2004. Researches were conducted with 9 villages in the Higashiyama Area by two steps. 1) Analyzing the interviews with the villagers and revealing the relations between the events that happened after the earthquake. 2) Drawing “Revitalization Curve” from the results of 1) with the villagers. This concludes that people in the community decreasing population recognized that their Revitalization Curves became nearly neutral.

第1章 背景と目的

1-1 研究の背景と目的

2004年10月23日に発生した新潟県中越地震から10年が経過した。被災地は過疎化、高齢化の進行した農村地域、全国有数の地滑り、豪雪地帯を含む「中山間地域」という特性を持っていたⁱ。特に被害の大きかった小千谷市東山地区では、一年以上避難勧告が解除されずⁱⁱ、震災を機に集落を離れる

決断をした人も多い。世帯数は半減したが、その中で、復興への取り組みが活発に行われてきた。本研究では、東山地区を対象に、地域住民と共に震災の経験を共有し、今後の復興政策、あるいは中山間地域支援に資するよう、一つ一つの出来事がコミュニティにとってどのような意味を持ったのかを明らかにすることを目的とする。

1-2 先行研究と本研究の位置づけ

中越地震の被災コミュニティの復興への認識の変化に関する研究では、震災前後の地域の危機感の変化をもたらす要因について整理したものⁱⁱⁱ（澤田ほか,2014）、被害の大きかった地域のリーダーと複数の住民へのヒアリング調査をから、コミュニティ復興感の要因について考察したもの^{iv}（稲垣ほか,2014）があるが、復興過程を共同で振り返りながら復興への認識を調査した研究は管見ではない。

1-3 研究の方法と構成

本研究では、集落における

復興過程での取り組みとコミュニティ全体としての復興への認識について、復興曲線を用いたインタビュー調査を行う。「復興過程を可視化しつつ、対話を深化させていくためのツールとして開発されたもの」^vである復興曲線を用いた研究^{vi}では、個人のインタビューが行われているが、複数名の参加の下行われたものはない。論文の構成は、2章で中越地震に関する施策と対象地域について概観したうえで、3章では9集落の取り組みと復興認識について東山地区で述べられたことを明らかにする。4章では復興曲線に係る要素を明らかにし、5章で総合考察・結論とする。

第2章 中越地震の概要と対象地域と調査概要

2-1 中越地震の概要

新潟県中越地震は、2004年10月23日17時56分に発生し、新潟県川口町を震源とし最大震度7を記録した。死者68名を出し、住宅被害は全壊3175棟に上った。災害の特徴としては、豪雪地帯の中山間集落での被害が大きかったこと、さらに日本有数の地すべり地帯であり土砂災害の発生やその危険性が懸念され、道路ネットワークの分断、孤立集落が多く

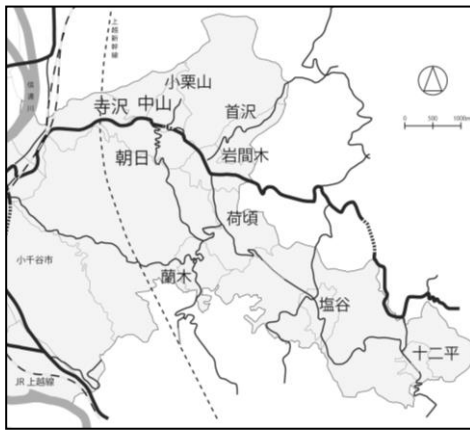
	寺沢	朝日	小栗山	中山	岩間木	首沢	荷塚	蘭木	塩谷
世帯数	20世帯	27世帯	21世帯	15世帯	19世帯	5世帯	11世帯	13世帯	20世帯
従前世帯	23世帯	40世帯	33世帯	16世帯	33世帯	16世帯	39世帯	34世帯	49世帯
帰村率	87%	68%	64%	94%	58%	31%	28%	41%	41%
神社	不動神社	不動神社	白山神社	八幡神社	なし	十二神社	石動神社	石動神社	仙龍神社
集落行事	神社行事、年始の挨拶、塞ノ神	神社行事、年始の挨拶、塞ノ神、夏祭り	神社行事、年始の挨拶、塞ノ神、忘年会	神社行事、塞ノ神、農区旅行、二十三夜様、(福生寺関連行事)	年始の挨拶、盆踊り	神社行事	神社行事、注連縄作り	神社行事、年始あいさつ、塞ノ神、注連縄作り	神社行事、年始の挨拶、塞ノ神、盆踊り、注連縄作り、慰霊の集い
避難所	総合体育館	総合体育館	総合体育館	総合体育館	総合体育館、サンラック	総合体育館	サンラック	サンラック	小千谷高校
仮設住宅	元中子	元中子	千谷第二、上ノ山	千谷川	千谷第一	千谷第一	千谷第二	上ノ山	千谷第一
避難勧告解除	2004/12/7	2004/12/7	2005/7/22	2005/7/22	2005/7/22	2005/7/22	2005/7/22	2004/12/7	2005/12/26

出所：澤田（2008）、東山復興マップ、他ヒアリング結果より作成

発生した。

2-2 小千谷市東山地区の概要

東山地区は、小千谷市の北東部に位置し、東は旧山古志村^{vii}、南は旧川口町^{viii}に隣接する。148世帯530人が生活しており、旧東山村^{ix}の10集落（寺沢、朝日、小栗山、中山、首沢、岩間木、荷頃、蘭木、塩谷、十二平）で構成されている【表1】



【図1 東山地区地図】

【表1】 地形は小山の起伏があり、平地がほとんどなく、沢沿いや緩やかな斜面等に集落が位置している。錦鯉発祥の地とも言われ、現在でも養鯉業が盛んな地域である。棚田での稲作はほとんどが自家消費用として生産されており、兼業農家が多い。国指定重要無形文化財である牛の角突きなど伝統文化も残る。

第3章 中越地震後の東山地区9集落の取り組みと復興認識

3-1 調査の概要

本章では9集落の復興への認識を復興曲線とともに述べる。調査の概要【表2】と流れ【図2】に示す。調査結果は【表3,4】に示す。

【表2 調査の概要】

調査方法	集団面接法 2時間程度の半構造化インタビュー
調査期間	2014年11月9日～11月30日（全9回）
調査参加者	東山地区9集落の地域住民 計79名
調査内容	震災後10年の集落の歩みを振り返り、集落の復興曲線を描く

1. 出来事を年表に記入	・集落内での出来事を下段に、その時の気持ちを付箋へ記入し、添付した。
2. 復興曲線の記入	・震災前の日常を「原状ライン」として、震災直後から現在まで、参加者同士で話し合いながら、集落全体としての復興への認識はどうだったかを合議しながら記入した。
3. アンケートへの記入	・集落の復興への認識と個人の復興への認識を明らかにする

【図2 調査の流れ】

【表3 集落別調査結果概要】

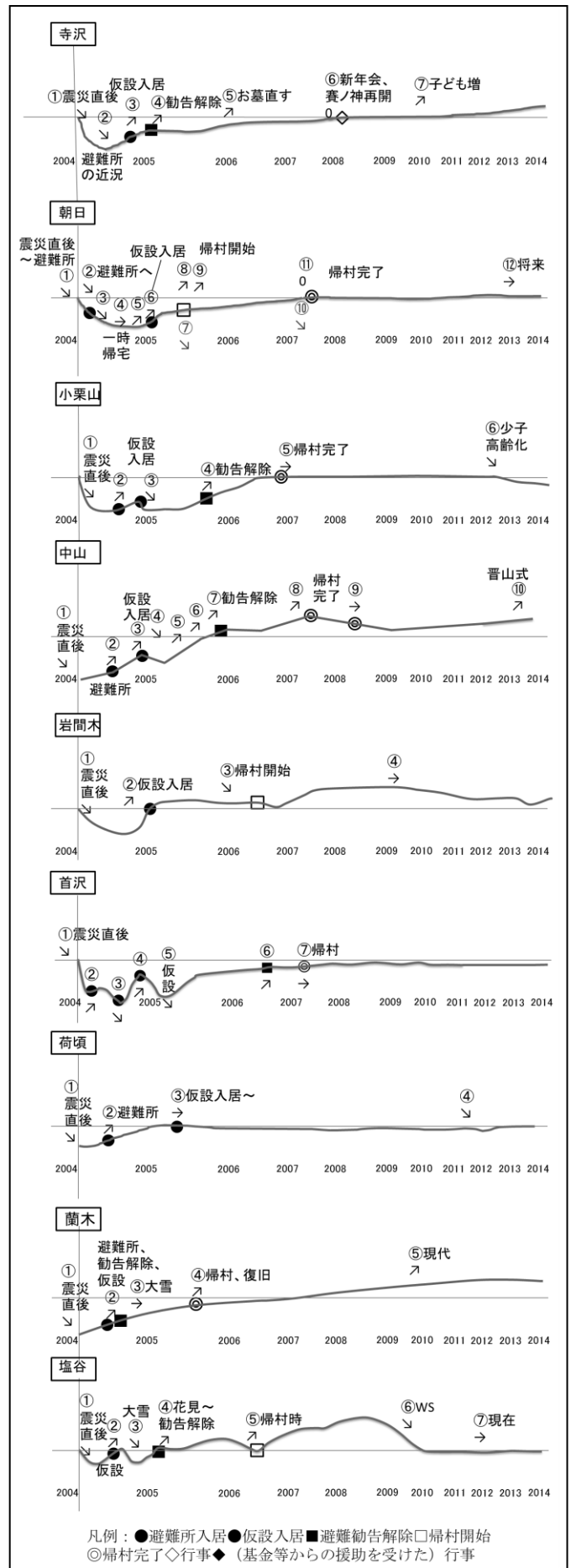
参加者	寺沢	朝日	小栗山	中山	岩間木	首沢	荷頃	蘭木	塩谷	合計
発話数	483	256	561	396	294	525	824	486	840	4665
トピック	寺沢	朝日	小栗山	中山	岩間木	首沢	荷頃	蘭木	塩谷	合計
1 震災前	38	38	55	24	110	64	48	464		
2 震災直後	59	16	61	94	49	117	167	94	663	
3 避難所	73	56	34	43	39	64	97	22	541	
4 仮設	77	14	77	50	46	85	137	18	594	
5 一時帰宅	17	11	33	0	52	31	0	100	244	
6 住宅再建	0	0	43	38	0	23	0	18	8	130
7 帰村時	17	34	34	27	19	4	22	56	27	240
8 復旧	72	32	52	8	18	17	64	21	41	325
9 帰村後	9	12	12	20	16	10	45	24	136	
10 行幸	65	38	77	64	10	88	64	25	256	687
11 集落について	10	18	24	0	0	30	23	105		
12 変化	9	20	72	10	19	6	31	51	83	301
13 今後	0	13	14	23	58	6	114			
14 その他	0	10	10	5	6	61	14	15	121	
合計	483	256	561	396	294	525	824	486	840	4665

3-2 9集落の取り組みと復興への認識

1. 寺沢集落

①震災直後の混乱の中でやむを得ず避難する状況になったことや、狭い避難所の中での苦労が挙げられた。②早く出たいと考えていた避難所から③仮設住宅へ移れると決まった時

【図3 9集落の復興曲線】



【図3 9集落の復興曲線】

点からプラスへ転じている。帰村時はようやく自宅に戻って来て安心したことが上昇へ繋がった。自分の居場所を確保できたこと、これから家を直すこと、雪に立ち向かう気持ちが語られた。寺沢集落では、住宅の再建が日常へ戻る一つの目安といえる。④勧告が解除され、集落内へ自由に出入りできるようになった。⑤2006年から2008年の復旧過程では、神社や集落センターの修復等を集落内に技術を持つ人を中心にほとんどを自分達で行ってきた。これらの共同作業によって集落の一体感と達成感を得ている。⑥原状ラインに戻る。⑦2010年頃からは集落内で子供が増えてきていることが語られ、復興曲線は上昇へ転じた。

2. 朝日集落

①避難所へ避難する際の、「もう戻れないかもしれない」という気持ちや、②一番どん底にいる気分が述べられた。③最初の一時帰宅時は、先の見通しが立っていない段階であり、「来た人はみんな沈み込んでいた」という語りがあった。④一時帰宅時はまだ先の検討がついていなかったと述べられた。⑤仮設への説明会や見学会は、避難所生活の終わりを実感できる機会となり、復興曲線は上昇へと転じる。⑥仮設に入居してからは、家族単位での居場所を確保した安心感だけでなく、集落単位で近くの仮設へ入居できたことからの安心感も得られている。⑦また、復興曲線には表れていないが、集落へ戻ってからの復興に対する苦労や、やむを得ず離村した人たちの落ち込みについても語られた。⑩仮設住宅から帰村した場合、元の場所へ戻ることが出来て嬉しいと感じる人がいる一方で、仮設住宅での便利で賑やかな環境に慣れてしまい、帰村することで気分の落ち込みを感じる人もいた。⑧⑨帰村完了後（2008年以降）の集落の具体的な出来事については語られなかった。⑫今後については「残ったもので維持していこう」との意見が述べられた。

3. 小栗山集落

①女滝の崩落やヘリでの避難時に見えた浦柄の被害などを目の当たりにしたことで「みんなこっげなとこダメだと思った」とあるように自宅へ戻れない可能性も考えており、始めの落ち込みに影響している。②避難所では、自衛隊風呂や床屋が来てくれたことがありがたかったと述べられた。仮設入居時は一時の上昇がみられるが、③再び結露と豪雪を理由に落ち込んでいる。2006年7月22日に避難勧告が解除され、④徐々に集落へ人が戻り始め復旧作業も進められ、曲線の上昇が記入された。⑤花壇などの活動も行われているが、盛り上がることはなかったと述べられた。⑥ここでは主に、集落の維持管理費、少子化、高齢化に関する話題が述べられた。数年前に若くして亡くなった住民の事も述べられ、下降線が記された。

4. 中山集落

①マイナスの位置から曲線が記入された。②避難所入居時から上昇へ転じると述べられた。③仮設入居時にも上昇が記入された。④2005年2月、ようやく仮設での生活が落ち着いた頃に、復興住宅建設予定地となった場合の退去を市から打診される。別の場所へ移らなければならないという落胆から、

曲線の落ち込みが述べられている。⑤仮設では女子会の開催が始まった。開催に至った要因として、すぐ集まれる場所（談話室）があったことが述べられた。⑥春の花見では、近くに大きな桜の木があったことで開催され、ボランティアの人と一緒に楽しんだことが述べられた。「だんだん復興に進んでいる」と上昇する曲線が記入された。⑦避難勧告の解除で上昇する。⑧帰村完了時を最も高い位置とし、その後安定してきたことが述べられ緩やかな下降に転じる。⑩2014年には30年ぶりとなる福生寺の晋山式が行われ、わずかな上昇が記入された。

5. 岩間木集落

①仮設へ入居するまでの期間は下降線が記入された。②仮設入居時は、すごく良いところに来たなど感じたことから、上昇の線が記入された。③仮設入居中は、帰村する世帯についてははっきりとしたことはわからず、2006年に帰村した時点で最終的な帰村世帯の把握ができたと述べられた。住民が少なくなったことに対して曲線の下降が記入された。④「落ち込んでばかりはいられない」という記入者の意思も入り、プラス地点を並行に推移した。

6. 首沢集落

①地震当日は「明日家を片づけなきゃ」と思った程度だったが、翌日明るくなってから被害の大きさを理解した。池や水田の状況を見て、「もう住めないかもしれない」と感じた人もいた。以上の意見から下降線が記入された②避難所となった総合体育館は、集落よりも安全なイメージがあり、安心したと述べられた。③この段階では帰村の目は立っておらず、先の見えない状況でもあるため仮設入居時まで下降する線が記入された。④仮設入居時には、「恐怖からの安心」ではなく、「家族単位の安心」を感じている。共同生活の中での気遣いからの解放や、壁一枚でもプライベートが確保されたことが述べられた。「復興へのワンステップ」となったという意見も踏まえ、少し下降してから、わずかな上昇が記入された。⑤帰村後は、5軒で集落維持をしていかなければならないことから、将来に対する不安を抱いている。また、大雪による影響もあり、下降する線が記入された。⑥避難勧告が解除され、また、公民館や鎮守様の復旧も復興への歩みを感じられている場面として述べられているといえる。⑦5軒で維持している状況も加味して、原状ラインを100とした場合98%の位置で推移する線が記入された。

7. 荷頃集落

①曲線記入時に、下降に言及する発話は見られなかったが、マイナスの位置から記入が開始されている。②ここでも曲線記入時に浮き沈みに関する発話は見られなかったが、仮設入居時に向けて上昇する曲線が記入された。③時期については明言されなかったが、仮設入居時付近から横軸上の上を平行に直線が記入された。その理由として、「無理しなかったんだ、淡々と」などの意見が述べられた。また、「なにもしていないし、何もできない。」という言葉もあった。④理由は明言されなかったが、わずかな下降が提案され、記入に反映された。ここでは急激な世帯数の減少が述べられた。

8. 蘭木集落

①震災直後の落ち込みが記入された。②避難所はサンラックに入っており、体育館よりも規模が小さかったため「だいたい知っている人ばかり」でよかったと述べられた。③除雪の苦勞が述べられている。④帰村開始や復旧を感じてきたことが述べられた。帰村以降の上昇は諦めも含めて「先を見るイメージ」ということで上昇する線が記入された。

9. 塩谷集落

①仮設へ入居するまでの間は、余震に対する不安から下降する曲線が記入された。②仮設入居時は、避難所から個人の空間が確保される「小屋」に入居できて大喜びだった。③「いろんな切ないことがあって」と述べられた。これは積雪による家屋の倒壊を指していると考えられる。曲線の記入では、花見頃に元気が出たこと、片づけの時は空元気だったことが述べられながら緩やかな上昇が記入された。年末に避難勧告が解除されたが、本格的な降雪期に入る前に解除されても、自宅の修復は間に合わないことから、「今頃解除されたってどうしようもない」「とぼけてるんだか」といった行政に対する批判の声が述べられた。⑤2007年～2008年にかけては大学教授らからの支援もあり、震災前にはなかった復興に向けた活動が次々と始まった。曲線の語りでは、「帰って来てこれからだ」、「復興に向けての元気があった」、「集落全員が一丸とならないと物事が出来ない時期でもあった」と述べられ、曲線は一番高い位置まで記入された。⑥2009年以降もそれまでに始まったイベントや行事は継続して行われているが、曲線記入時には、徐々に「普通」に戻ると述べられ、下降後に原状ライン上に線が記入された。⑦生活の落ち着きと同時に、個人個人の考え方にも変化が出てきたことについても触れられた。今後については、高齢化や子供が居ないことなど不安材料が多いことが述べられた。

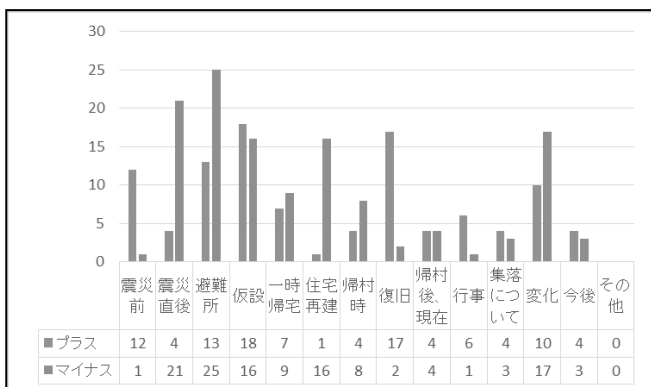
第4章 復興曲線への影響要因について

4-1 本章の目的

本章では、9集落の調査で得られた4665個の発話の性質を整理し、復興曲線の上下に影響を与える要因について考察を行う。得られた発話は14のトピックへ分類できた。

4-2 トピック別の意見性質の差異

トピック別に発話の性質を分類し、プラスとマイナスの要素を抽出した結果を【図4】に示す。震災直後から避難所にかけてはマイナス要素の発話が多い。仮設入居中はプラス要素の方がマイナス要素よりも多かった。住宅再建時は帰村者



【図4】各トピック内での発話の性質数

側にとっては小千谷市の制度に対する不満が多く、マイナス要素が多くなっている。復旧では、復興への手ごたえを感じる人も多く、プラス要素が多く述べられた。また、変化に関しては、少子化や高齢化と言った懸念もあり、マイナス要素が多くなっている。

4-3 復興曲線の上下に係る要因

4-3-1. 下降要因

記入時に述べられた160個の発話のうち、37個が下降方向を示す発話内容であった。記入時に下降理由の述べられなかった荷頃集落を除く8集落で【震災直後】の下降が記入されている。そのほかに明確な理由として述べられた下降理由としては、【仮設住宅】入居中の、大雪や結露に関するもの（小栗山、塩谷、首沢）や、世帯数の減少がわかった時点での将来に対する不安（首沢）が述べられた。【少子高齢化】について実感する場面で下降することも述べられた。復興に向けたモードから日常へ戻ることを示す発話も見られた（塩谷）。

4-3-2. 維持要因

38個が維持を示す発話内容だった。【帰村完了】マイナス要素がないことから、落ち着いた、安定したことを実感した（中山）などと述べられた。

4-3-3. 上昇要因

82個が上昇方向を示す発話内容だった。【仮設入居】時には言及されなかった荷頃以外の8集落で上昇理由を述べる発話があった。「いい意味でのワンステップ」と復興を実感する場面であったことがわかる。【避難勧告解除時】についても、今までは許可が必要だったところから自由に出入りできることに對して上昇が述べられている。

第5章 総合考察・結論

本研究において、以下のことが明らかになった。

- ・コミュニティの復興過程を追いながら復興曲線を描くことができた。また、集落としての取り組みが多いほど復興曲線に変化が反映された。
- ・人口が減少したコミュニティでも原状ライン到達程度の復興への認識を持つことが明らかになった。

（参考文献、脚注）

i 内閣府,新潟県中越地震復旧・復興フォローアップ調査報告書,2008

ii 帰村を果たした小千谷市塩谷集落では2005年12月26日に避難勧告が解除となった。集団移転を決定した十二平集落では2006年4月14日に避難勧告が解除となった。

iii 澤田雅浩ほか,新潟県中越地震後の地区・集落の変化とその要因に関する一考察-「地域」を対象としたアンケート調査から- その2- (2014) 日本本災害復興学会 2014 長岡大会 講演梗概集,pp.112-115

iv 稲垣文彦ほか,新潟県中越地震被災地における10年目のコミュニティ復興感-区長、住民を対象としたヒアリング調査から- (2014) 日本本災害復興学会 2014 長岡大会 講演論文集,pp.116-119

v 渥美公秀,災害ボランティア-新しい社会へのグループ・ダイナミクス, (2014) 弘文堂 pp.201-208

vi 宮本匠ほか,被災者による復興過程の意味づけについての研究,2008

vii 現長岡市 (2010年3月合併)

viii 1954年小千谷市へ合併